今昔物語

福田清人

古典文学全集〈8〉

今昔物語

福田清人

福田清人
今昔物語
ポプラ社　昭和42 (1967)
262 p　23cm　(古典文学全集　8)
〔分類〕918

著者略歴

1904年，長崎県に生まれ，東京大学国文学科を卒業後，創作・文芸評論で活躍するとともに，日本大学講師，実践女子大学教授等を経て，現在，立教大学教授。
日本文芸家協会理事，日本ペンクラブ会員，日本児童文芸家協会理事長。主な著書には，「若草」「天平の少年」「春の目玉」「秋の目玉」「日本近代文学紀行」「国木田独歩」「文章の作り方」等，多数がある。

古典文学全集・8
今昔物語
(著者との話し合いにより検印廃止)
480円
編著者・福田清人
発行・昭和42年12月10日©
発行者・久保田忠夫
発行所・株式会社 ポプラ社
東京都新宿区須賀町5　振替東京149271番
活版印刷・新興印刷製本株式会社
オフセット印刷・有限会社 トラヤ印刷所
口絵原色印刷・株式会社 双美堂
製本所・富士製本株式会社
クロス・東洋クロス株式会社
本文紙・北越製紙漉上質

はしがき

みなさんは、だれでも芥川龍之介の名は知っていますね。その作品『鼻』を読んだ人もあるでしょう。芥川は、その『鼻』を、夏目漱石にほめられて、さらに『芋がゆ』を発表して、新進作家として、文壇にでることができました。そして、ぞくぞくと多くの名作を書き残したのでありました。

この『鼻』や『芋がゆ』の原話ののっているのが、『今昔物語』です。芥川がこの原話を発見しなかったなら、文壇登場はもっとおくれたでしょう。いっぽう、また芥川によって、『今昔物語』は有名にもなりました。

この物語は、今から八百年以上も昔、平安朝の末にできたものだろうとされています。その著者もはっきりしていませんが、宇治大納言源隆国説などがあります。天竺(インド)・震旦(中国)・本朝(日本)三国にわけ、千編以上の興味ふかい短編集です。こんなたくさんのおもしろい話を集めたことは、世界的に有名な『イソップ』や『アラビアン・ナイト』にまさるといっていいくらいです。仏教の教えもしみこんでいますが、社会各層の人たちの生活がえがかれています。ここには、その中でもっともおもしろいものを選びました。『今昔物語』は〈今は昔〉ということばではじまっているのでこの名がありますが、私は〈昔むかし〉と訳してみました。ではみなさん、楽しみにしてこの本を読んでみてください。

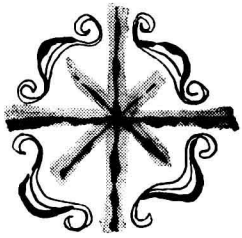
《目　次》

亀のおしゃべり……六
猿の生きぎも……一一
お山の石塔……一八
わらしべ長者……二八
力くらべ……四四
わざくらべ……五〇
占いの名人……五九
ふしぎな琵琶……六五
蛇島に住んだ漁夫……七五
芋がゆ……九六
水の精……一一八
人食い鬼……一三

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

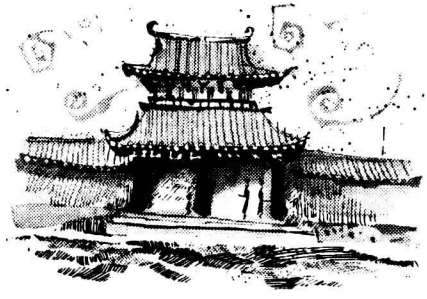
変わりはてた妻……一三一
鼻……一四七
猫ぎらい……一五七
魔法使いの老人……一六七
腰ぬけざむらい……一七三
釣鐘どろぼう……一七八
羅城門……一九三
怪盗袴垂……二〇二
猿の恩返し……二二二
馬になったお坊さん……二三三
魚売りの女……二四五
解説……二四九

装てい　新井五郎
さし絵　武部本一郎
カット　難波淳郎



今昔物語

福田清人



亀のおしゃべり

昔むかし、天竺(インド)の国でのお話です。

ある年、ひどい日照りがつづいたことがありました。お日さまが、かんかん照りつけて、くる日もくる日も、一滴の雨さえ降らないのです。土地はからからになって、しめったところは、どこも見あたりません。今まで青あおとしげっていた草も木も、すっかり枯れはててしまいました。

ある池に、長いあいだ住みついていた亀がいました。その池の水も、この日照りにあって、すっかり干あがっていました。

「とうとう、水がなくなってしまったな。このままでは、もう、死ぬのを待つばかりだ。どうしたらよいかな。逃げだすにも、池のまわりの崖がけわしくて、とても登れないし……」

弱りはてた亀は、首をひっこめて、じっと考えこんでしまいました。

ちょうどそのとき、ばたばたと、いう音がするので、見ると、一羽の鶴が舞いおりてきて、干あがった池の底を、あちこちと、餌をあさって歩きまわっています。

「そうだ、鶴さんは羽があって、空を飛べるから、どこか水のあるところへつれて行ってもらおう。」

亀は、のそのそとはって、鶴のそばへ近寄って行きました。

「もしもし、鶴さん、あなたは羽があって、空を飛べるからいいですね。高い空から見ると、きっと眺めがよいでしょうね。」

「うん、なんといっても、大空を、あるいは高く、あるいは低く飛ぶのはよい気持ちだね。春には、野や山にのびだした、草木の若葉の美しい眺め、夏には、青あおと色どられた田や畑、秋は、山から山へ、色とりどりの紅葉の美しさ、冬は冬で、まっ白い霜やきれいな雪景色、こおりついて、鏡のようにきらきら光る湖など、一年じゅう美しい景色ばかり見て暮らしているのさ。それにくらべると、亀さんはお気のどくだね。きみは、こんなちっぽけな池だって、すみからすみまでは知らないんだろう。」

「そうなんですよ。それにごらんのとおり、この日照りで、池の水もすっかりなくなってしまい、死ぬか生きるかの、苦しいめにあわされているのです。鶴さん、お願いです。なんとかして、助けてくださいよ。」

「それはかわいそうだね。このままほっといたら、死ぬのを待っているようなものだからね。」

「そう、あっさりいわないでください。私とあなたは、人間たちからまで、おめでたいときに鶴亀と、ならべてたとえられるほど、切ってもきれない仲じゃありませんか。どうか、助けてくださいよ。お願いです。」

「それでは、私がよいところへ案内してあげましょう。いや、ちょっと待ってくれよ。しかし、亀さんには羽がないし、といって、私がおぶって行くこともできないし、えーと、口でくわえて行くわけにもいかないし、どうしたらよいかな。はて、困ったな。」

鶴は長いくちばしをうちふって、考えこんでしまいました。亀もだまって考えています。

「そうだ、よいことを思いついたぞ。」

突然、鶴が大きな声をだしました。

「なんですか。いい知恵がうかびましたか。」

亀も首を長くのばして、鶴をながめました。

「それはこうするのだ。一本のほそい棒切れのまん中を、お前さんがしっかりくわえるのだよ。そしたら、私がもう一羽のお友だちを呼んできて、二羽で棒の両端をくわえて、お前さんをぶらさげて飛んで行くのさ。」

「なるほど、それはいい考えですね。ぜひそうしてくださいよ。お頼みします。」

「しかし、生まれつき亀さんは、おしゃべりだから心配だな。途中でおしゃべりしたら、棒切れから口がはなれるよ。はなれたら、落っこちて、もう命はないからね。たいへんだぞ。どんなにめずらしいものがあっても、おたがいに、ぜたっい口をきかないことにしよう。いいかね。それがかたく約束できるなら、やってあげるよ。」

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

「ああ、その点なら、だいじょうぶですよ。鶴さんが、よいところへつれて行ってくれるのでしたら、私はぜったいに、おしゃべりなんかしませんよ。命にはかえられませんからね。どうぞお願いします。」

鶴と亀は、顔を見合わせて、にこにこと笑いました。

まもなく、鶴は一本の棒をくわえてきました。もう一羽の、鶴のお友だちもつれてきました。

棒の両端を二羽でくわえ、まん中を、しっかりと亀にくわえさせると、さっと大空高く舞いあがって行きました。

ぐんぐん空高くのぼるにつれて、長いあいだ住んでいた池も、だんだん小さくなっていきました。

――おしゃべりさえしなければ、これで水のあるところへ運ばれて、助かるのだぞ。よし、がんばるぞ。

生まれてはじめての空の旅です。山や、川や、広い野原や村など、まだ見たこともない大きい景色が、つぎからつぎへと、亀の目にはいってきます。

やがて、山の向こうに広い海が見えはじめ、まっかな夕焼け雲が、きらきらと輝いて見えはじめました。

――きれいだなあ、水もたくさんあるなあ。

と、あまりの美しさに、我を忘れて、見とれてしまいました。それとともに、鶴とのたいせつな約束もうっかり忘れてしまって、

「鶴さん、ここは、なんというところでしょうね？」

と、口をきいてしまいました。

そのとき、鶴も思わずつりこまれて、

「ここはね……」

と、いおうとしたとたんに、なん百メートルという高い空中から、まっさかさまに落ちてゆく亀の姿が、黒い点のように、鶴の目にうつったのでありました。

猿の生きぎも

昔むかし、天竺の国の海岸に、小さな山がありました。

その山に、一ぴきの猿が住んでいて、木の実を食べて暮らしていました。また、海には、夫婦の亀が住んでいました。

亀のお嫁さんは病気をして、長いこと寝たきりです。いろいろの薬を飲ませましたが、いっこうなおるようすもなく、元気のない声で夫の亀に話しかけました。

「あなた、お願いがあるのですが……」

「なんだね。」

「どんな病気にでもよくきくお薬があるって聞いたのですが、さがしていただけませんかしら。」

「ほう、それはなんていう薬かね。」

「それは、どこにでもあるというものではないらしいのです。」

「お前の病気が、早くなおるというのだったら、なんでもさがしてきてあげるよ。いってごらん。」

「猿の生きぎもとか、聞きました。」

「なに、猿の生きぎも……。そんなものならわけないよ。海岸の山に猿がいるから、ちょっと行って、もらってきてあげよう。」

夫の亀は、すぐに出て行きました。かんたんに引き受けたものの、猿の生きぎもをとるということは、まったくむずかしい仕事です。

――よわったな。いきなり猿に、〈きもをくれ〉といったって、くれるものじゃないし。これはなんとか猿をだまして、取るよりしかたがないな。なにかいい知恵はないかな。

夫の亀が、あれや、これやと、考えながら泳いでいるうちに、

「そうだ、いい考えがうかんだぞ。」

と、うれしそうに、ひとりごとをいいました。

さっそく、海岸にあがって行くと、ちょうどうまいぐあいに、猿が山からおりて、砂浜に遊びにきていました。

「猿くん、いいお天気だね。なにしているのかい。」

と、したしそうに、そばに近寄って、声をかけました。

「おお、亀くんか。なにかおいしいものはないかと、さがしているのさ。」

「こんなところにこなくたって、猿くんのいる山には、いっぱい木の実があるじゃないか。」

「いや、どういたしまして。昔は食べきれないほどあったんだがね。このごろは、めっきりすくなくな

って、あちこちとさがすのにひと苦労だよ。」

「そうかね。そりゃ、気のどくだな。そこへいくと、ぼくの住んでいる近くには、木の実や草の実なんか、一年じゅういっぱいなって、いくらでもあるぜ。あんなもの、だれも食べないからな。」

食い意地のきたない猿は、目をまるくして、よだれをたらしそうになりました。だまされているとは知らないで、すっかりのり気になった猿は、

「亀くん、そんなよいところがあるのかい。ひとつたのむよ、ぜひ、ぼくをそこへ連れてってくれないか。」

と、頼むのでした。

亀は、うまくゆくぞと心のうちに喜んでいます。

「それじゃ、すぐ連れてってあげよう。ぼくの背中につかまりなよ。」

と、猿をのせて、亀が泳ぎはじめました。

広い海の上を、沖のほうへ進んで行きます。ときどき大波がくると、しぶきが、猿のからだにかかります。うしろをふりむくと、海岸の山も、はるかかなたに、小さく見えるようになってきました。まわりは青あおとした海ばかりです。

猿は、なんとなく、心細くなってきました。

「亀くん、まだ遠いのかい。林なんて、まだちっとも見えてこないじゃないか。」

亀は、もういいだろうと思って、

「はっはっは……、きみはばかだね、なんにも知らないで。海の中に、林があると思っているのかい、はっはっは……」

と笑いました。

「えっ、それじゃ、うそだったのか？」

「大うそだよ。じつはね、ぼくの妻が病気で苦しんでいるんだよ。それをなおすには、きみの生きぎもが、いちばんいい薬だって聞いたのさ。だから、ほんとうは、きみのきもをもらおうと思って、だまして連れてきたのさ。」

「えっ！　ぼくの生きぎもを取るんだって……」

「うん、気のどくだけど、きもをもらうよ。いくらきみが逃げようとしても、もう帰れないぜ。」

猿はびっくりしました。

「ちくしょう！　だまされたか。」

と、くやしがりましたが、このまま行けば殺されるので、ずるっこい猿は、

――よし、それならこっちもだましてやれ。

と、うまいことを考えつきました。

猿はなにくわぬ顔をして、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com